

アラスカ学術調査隊について

西 原 正 夫

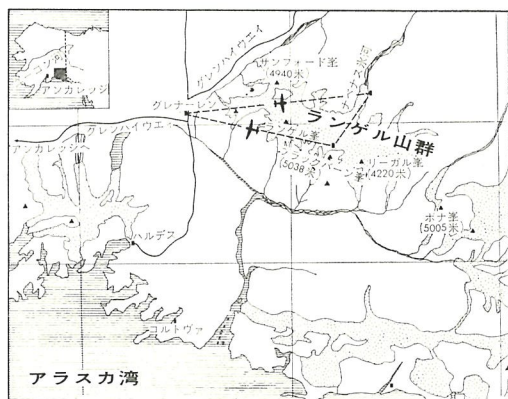
このたび同志社大学から、学内の教員が二名も加わり、また、構成メンバーの大半が現役の学生というような名実ともに大学が送り出す海外学術調査隊が、アラスカに派遣されることになった。同志社大学としては、こうしたことはもちろん初めてのことであるので、唐突な感じをうける人もあるかも知れない。そこで、この起りから記してみよう。

アラスカ計画

私もアラスカとは全然無縁ではなかった。私は英国氷河学会の会員でもあるので、かねて氷河には興味をもっていたし、また、一昨年英国ケンブリッジのスコット極地研究所にある氷河学会を訪ねたとき、日本に近いアラスカ地域の調査をすすめられたこと等もあつ

て以来莫然とはあるが、アラスカという地域は頭の隅にこびりついていた。ちやうど、そこに山岳部の現役やOBの連中が、アラスカ行を考えていることを聞いたので、具体的にアラスカに学術調査隊を出すことを立案するに至った。

まず資金をどうするか。第二に人の問題。そうこうしている内に二カ月、三カ月はまたたく間に過ぎた。幸いにも同じ工学部以北村君がいた。北村君は学生時代山にも登り、また南極で二回も越冬した経験もあり、今回の話にはうってつけの人物に思われた。さっそく話をしてみたが、ちやうどそのとき、彼所属する京大土山岳会の計画した一九六四年度カラコラム遠征のメンバーに決定しており、アラスカには参加できないとのことであ



った。

年が明けたがことは発展しそうになかった。ところが、カラコラム遠征は、バキスタン政府の不許可するところとなり、北村君がアラスカ計画に全力をそぐことが可能となった。私が氷河に興味があるとはいえず、私自身が出かけてゆく気は全くなかった。そこでアラスカは北村君に委せて、自分は隊を送り



ナベスナ氷河

出す役を引受けようと思った。

事をなすにはまず問題を提起せねばならない。そして次には、それを買う人が必要である。私の第二段階の仕事は、このアイデアを買ってくれる人をみつけることであつた。

幸いにも前理工学研究so長の齋藤玄三雄教授、前工学部長の星名案教授（現理工学研究so長）が、これをとりあげてくださつて問題は解決した。學術調査隊という以上、教員一人ではという訳でも私も加わらなければならぬこととなり、こうして理工学研究so主催としてのアラスカ學術調査隊ができた。

調査隊の目的

隊の目的は二つある。まず學術で、その第一は氷河の研究である。これには光弾性応力計を使用して、氷河のレオロジー的問題を解明することを目的としている。これによつて氷河の応力分布、流動等に関する基礎データが得られると同時に、従来手がつけられていなかった氷河雪崩れの原因の解明に、一役買ふことが期待されている。學術の第二は、宇宙空間の物性の研究である。これには最近工

学部の小川教授の開発したR6磁力計を用いて、アラスカのごとき高緯度地域に特有な地球磁場の脈動現象を測定し、また地球外気圏から伝播してくるVLF（低周波電波）と称せられる数kcの周波数をもつ電波をあわせて測定して、宇宙空間の物性を知ることが目的としている。これによつて宇宙空間の電波伝播の問題にも糸口が与えられ、宇宙通信工学のための基礎データが得られるものと期待されている。

第二の目的は登山である。氷河の研究にはアラスカの東部カナダとの国境近くにあるランゲル山脈中のナベスナ氷河を選んだので、このランゲル山群中の最高峯ブラックバーン（五〇三八メートル）が登山の目標となつた。高きこそヒマラヤにはおよばないが、高緯度にあるので実際の感じは六〇〇メートルをこす山に匹敵するものである。この山は残念ながら処女峯ではない。第一登は一九一二年に、第二登は一九五八年にそれぞれすんだが、しかし今回の第三登は、ルートはもちろん新しいルートを開拓し、また付近の処女峯群をも登頂する予定なので、登山界へも業績を残しうるものと確信している。

メンバーの構成

隊員の選考はなかなかむづかしいものである。まず資格としては、荒々しい自然に耐えてゆかねばならないので身体強壮でなくてはならない。いやそれにもまして重要なことは、何ヵ月も狭いテントの中での生活が続くので、とかく対人関係に問題がおこる。つまり精神の焦々からくるものである。あまりすらりとした都会人はこうしたことには向かない。とにかくそれに打勝つだけの精神的強さが必要だがそれがあるか否か。無論これらのことは、隊員候補の人達とは一緒に生活をしたことがないので判定のしようがなかったが、結局のところ、今までそうした生活をした経験のある人であればこの点は大丈夫であるうとの結論に達し、長谷川、荒木、川井、松本、田中、内藤の六名の隊員をえらび、つぎのような隊の構成ができあがった。

隊長 西原 正夫(40) 工学部教授
副隊長 北村 泰一(32) 工学部講師
隊員 長谷川 曉一(25) 東芝機械KK
山岳部OB

〃 荒木 徹(25)

理工学研究嘱託
京大理学部大学院
理工学研究嘱託

隊員 川井 康男(24)

山岳部員

〃 松本 朗(21)

工学部四回生
山岳部員

〃 田中 正男(21)

経済学部四回生
山岳部員

〃 内藤 真一(20)

文学部四回生
山岳部員
法学部四回生

日程と経費

つぎに資金の点であるが、星名教授、斎藤教授はじめ多数の方々のご尽力によって、朝日新聞の後援が決まり、また多くの会社から資金や物資の寄贈をしてくださることになり、ようやく軌道にのりつつあるが、なお前途遠慮である。各位の御助力をお願いする次第である。

第一陣は六月上旬に出発し、続いて第二陣、三陣と幾組かにわかれて出発するが、六月下旬にはアンカレッジに勢揃いし、七月上旬から約四〇日ないし五〇日間の予定で、ナベス

ナ氷河流域での調査、登山が始まる。荷物は約一トンで、輸送には民間機をチャーターし、山のふもとから山脈を飛びこして氷河上へ着陸する。一切の行動を終えて再びアンカレッジに揃うのは八月下旬である。日本帰着は九月上旬である。

最後に一言申しそえたい。今回のことは学術調査といつても、やはりこれは一つの探検である。由来探検という言葉は日本人には余りなじみがないようである。近代国家に脱皮して百年そこそこの日本としては無理からぬことであるが、探検行為は、その国の文化というか国力のバロメータの一つである。一隊を送り出すのに、例えば今回の場合は五〇〇万円必要であるが、社会的価値や科学的価値から考えると割合に回収率のよいものであるといわれている。アラスカ調査隊が露はらいの役をつとめ、本学の人文、社会、自然科学の各分野から、次々に調査隊が派遣されることになれば、今回の計画の意義も一段と増すことと信じている。

(工学部教授・材料試験法)



マニラを後に

どんより曇った空を突抜けるように航空灯がグルグル廻り、華やかな町の灯がにじむようにどす黒い空を染めていた。私たちを乗せた飛行機はこんなマニラを後に一路目的地に向かっていた。むし暑い夜だった。それもそのはず、もう赤道を越え真夏の領分に入っ

オーストラリア見たまま

岩崎 絢子

いた。私は半ば手さぐりで荷物からレースの一塊りを取出した。あと何時間かで降立つはずの夏の日のために着替えようというのだ。大急ぎで、しかも静かに。私は急に日本を遠く離れたことを感じた。一九六四年一月二十二日真冬の日本を後にした日のことである。

オーストラリア

政府・貿易省の招待によるMBS・TV海外取材班の一員として、私は五十日間にわたる旅の第一歩をこうして踏み出した。私たちは主に産業、そのほか何でも日本の聴視者に楽しまれるであろう物なら飛んで行き、撮りまくった。十三本の三十分番組をたつた五十日で撮るといふのだから、その忙がしいこと。おかげで私の旺盛な未知の物への冒険心と、

堂々と掲げていた何でも見てやろう、何でもしてやろうの精神は、ぐつと大巾に制限を受けることになった。このチームにおいて私はインタービュアーなる役目を仰せつかった。ちょっとした話の行きがちがいから分にはずしたことをさせられるはめになったのであるが……。そもそも英語を国語とする国へインタービュアーとして行くからには、英会話堪能を必要不可欠の条件とする。にもかかわらず、十年も同志社でみっちり教え込まれたはずのわが英会話能力は、お粗末にも何はア何とかやつと々の域を出ないものであった。図々しさにもほどがある。

果しない大地

私たちはシドニーを振出しに、ブリスベーン、メルボルン、アデレード、ホバートと文字通り飛びまわり、撮りまくった。

日本の十分の一にも満たない人口、その二十倍以上の面積。想像もできないほど大きい豊かな国である。初めてその土地の大きさを身を以って感じた時、ガーンと頭にくるほどショックを感じたのは私だけであつたらうか。見渡せどく果てしなく続く大地。私た

Made in Japan.

ちが見たのはほんの一部分に過ぎないが、その恐ろしいほどの「広さ」を思う時、ちっばけな土地にひしめき合つて生きている私たちがには、実に羨やましく思われた。しかし、その馬鹿でかいほどの国土も全部にわたって人間が住み、文明が入込んでいるわけではない。砂漠のせい、水のないせいである。全面積の三分の一以上はただ水がないばかりに人が住めず、開発されずに残っている。それでも土を愛する人の心はかつて砂原だったところに水を汲み上げ、家を作り、畑を耕し、少しづつ、次から次へ土を開きつつある。私たちの訪れた町や村にも、五、六十年前には砂漠のただ中であつたと聞いたところは多い。

もともとイギリスの Captain Cook が一七七〇年にこの大陸を発見し、その後、一七七八年からぞくぞく植民が始まつたというから、まだまだ若い国、どんどん開発されるのは当然といえば当然だ。しかし、砂漠に作物を育てるのは容易なことではあるまい。「水さえ豊富にあれば、われわれはもつと積極的に発展できるのだが」どこへ行つても耳にした実感のこもつた言葉であつた。

かさかさに乾き切つた空気。ぎつしり茂つた草木の林、それに水がない奥地——彼らは never-never と呼ぶ——では、ちよつとした火の気でも大火事の原因となる。彼らはこの上もなくこの bush fire を恐れる。が、原因不明でもこうした火事はしょつちゅうあるという。日本のように、どこもかしこも人間であふれているということはないから、人間の被害は極めて少ないそう。私たちが数度こうした大火の跡を見た。焼ける最中を想像すらできない広範囲にわたつていいる跡も。しかし、よつばどの奥地でない限り、焼け跡にもすぐ若い木が植えられ、次代に備えられている。

一月二十六日、建国記念日。私たちはシドニーのある公園へ出かけた。例によつて知事とか、市長とかの挨拶があり、白人の女の子と原住民の黒人の女の子——この広い大地全部がかつては彼らのものであつた——が並んで歌を歌つていた。儀式が済んでゾロゾロ帰るかけると、旗売りのおばさんが一本買いなさい、買いなさいとオーストラリア国旗をいっぱい手に持つて呼びかける。面白いから買うことにした。私達が日本人だと分つたのか、

これは日本製だよ、としきりに言う。よくよく見るとなるほど棒の先についている小さな紙切れに、はつきり Made in Japan とある。建国記念日に売っている自分の国の旗が外国製品だとは、

素朴に 堅実に

オーストラリアはまだまだ若い。それゆゑ、この国の一番大きな不幸と思われることは、彼ら独自の文化・伝統を持たないことである。しよせん、よその国から流れ着いた人間が作り上げた国のことから、それでいいのかも知れない。しかしそれゆゑ、独立性が薄く、何かもうい感じがしないでもないのだ。彼らは豊かだ、それに彼らの生活は時に平和すぎるほど平和だ。往々にしてかれらはイギリスの伝統に、その思い出の中に生きているように見えることがある。どこへ行つてもエリザベス女王の肖像が掲げられ、God Save The Queen をその国歌として歌っている。どこか外国へ旅するといえ、ためらわず英国へ、わが母国へという。アメリカは大嫌いだとまでいう。その反面、彼らは英国から完全に分離された「オーストラリア人」なるものに大

いなる誇りを持つ。Walzing Matilda をオーストラリア国歌にしようという動きまであるそうだ。近年、移り住んで来た別の人種に「あれはオランダ人だ」とか「あれはイタリア人だから」という意識を持つような印象もある。ごちゃまぜ世界から一生懸命自分たちの世界を固持しようという感じ。有色人種の移民を禁じているのはせめてもの抵抗といふところか。

彼らは実に平和に生活している。平和すぎてこんなことでいいんだろうかとよそごとながら気になったほどである。新聞、ラジオにしても国内ニュースといえは交通事故とか、殺人とかでギッシリのわが国のそれと較べ、何とスカッとした、時には頼りないものであったことか。どここの誰々が結婚するとかモデルの誰々さんが休暇で海に来ているというニュースが写真入りで大きく報道されている。おかげで私たちは記者連中のいい餌にされ、それだけでもけっこう忙しかった。

彼らは裕福である、が決してムダ使いしない。素朴に堅実に生きている。外よりも内を、といった風で、アンバランスなまでに文化生活とやらを営もうとするわが同胞たちのこと

を思うと恥かしい思いさえした。都会より田舎へ行くほどそれが顕著で、筆司からベッド、小箱に至るまで十点ほど揃ったエリザベス朝風レリーフのほどこされた豪華な調度品や銀器、風格ある飾り物などが品良く備えつけられた農家を訪れたことがある。それでいて主人たちは立派に装っているというのではない。

カンガルーの国

私たちはメルボルンに滞在中、市から五、六十マイル南の Philip Island を訪れた。こは小さな島全体が動物保護地ともいふべきところで、道の両側に雑然と生えたユーカリの林を目を凝らしてよく見ると、小さな熊が枝のそこそこにつかまっているのが見えた。これが例のオーストラリア特有のコアラである。彼らは夜行性で昼間は枝に坐り、幹を抱いた格好で居眠っている。何とも可愛い熊公であった。もともと私たちのこを訪れた目的はペンギンパレードを見ようというものの。夜になると沖へ餌を取りに行ったペンギンが、咽の袋に小魚をつめて子供達の待つ浜へ帰ってくる。私たちが待っていると親ペン

ギンたちがピーピー鳴きながら、五十羽、百羽と組になつて帰ってきた。何でも数千羽もいるとか。私は職務上、ちっちゃなペンギンたちの待つところへマイク片手にピーピー声を取るべくのり出して行つた。ところが、ウンともスンとも言ってくれない。仕方なくマイクを遠のけるとまたピーピー。あきらめ切つて単身のこのこ近づいた。キョトンとして見た見ている。あんまり可愛いので撫でてやら、何と彼らはかみついてきた。けっこう痛かった。このペンギンたちは五十センチ位の小型で比較的暖かいところに住む種類のものだそうだが、こういう風景が見られるのは、世界でもここだけだそうである。ここにはアラシの保護地域もあったが見に行けなかった。これら動物すべては厳重に保護されている。これにひきかえ、カンガルーは優遇されていない。カンガルー狩りまであるほどだ。林の中を突つ走るハイウェイを通つていき、道路わきでデンとひっくり返っているカンガルーを二匹も見た。夜、光に誘われ走つて来る車に激突し、即死するのだそう。いくらカンガルーの国とはいえ、いささか信じ難い光景であつた。

(昭三九大英卒)